

飛鳥資料館特別展と 山田寺回廊再現

◆春期特別展示「山田寺東回廊再現にむけて」

展示は1996年4月16日～5月26日の期間に実施した。山田寺の継続的調査は1976年に始まり、塔跡から金堂、講堂跡と進行、1982年東回廊部を発掘したところ、回廊の建物本体が、横倒しに地中に埋もれた状態で姿をあらわした。回廊は東から西にむかって倒れ、そのまま粘土と砂の層に封印されて、奇跡的に1000年以上も地中に保存されたもので、最初期の日本仏教寺院の貴重な実物資料となる。その後の数次にわたる発掘作業の結果、1000点以上の建築部材が出土したが、すべての部材は長い年月のあいだに、脆弱になり多量の水分を含んで、このまま乾燥すれば、収縮、変形して原形を失う状態になっていた。貴重な資料を後世に伝え、研究資料として活用するためには、科学的保存処置が必要とされた。PEGを含浸する処理には10年以上の歳月が費やされ、主要な部材の保存処置は1995年になって、ようやく完成する。保存処理の終わった部材は、飛鳥資料館で組立て、地上に建っていた姿を再現する計画があり、その準備作業も含めて、発掘から10余年ぶりに全貌をあらわした山田寺東回廊の部材を、地面に横たわった出土時の状態にならべ、細部の観察が可能なかたちで一般の観覧に供するとともに、回廊発掘調査の経緯を振り返る展示をおこなった。

◆秋期特別展示「斉明紀」

展示は1996年10月8日～11月24日の期間で実施した。斉明天皇の治世は、大化の改新（乙巳の変）後の飛鳥の政治制度の大きな変換点となる時代だった。同時に国内的には阿倍比羅夫の遠征の記録が示すように、東北地方の経営が精力的に進められていく。国際情勢も、唐、新羅の勢力に対抗して百済を救援しようとする動きなどにみられるような、激動のさなかにあった。

飛鳥の地には、板蓋宮、饗宴の広場とみられる石神遺跡、わが国最初の水時計の遺構・水落遺跡、両槻宮との関連が注目される酒船石周辺遺跡など、斉明天皇にゆかりが深い遺跡が数多く残されている。この展示では、こ

ういった飛鳥の遺跡のいくつかを取り上げ、その意味するところを考えるとともに、遺跡や出土遺物を通して、この変動と改革の時代の雰囲気再現する展示を試みた。

◆山田寺東回廊再現

回廊は、資料館第2展示室の常設展示として再現された。全長で87m、23間あった東回廊のうち、部材の残りが最も良好だった、北から数えて13・14・15間目の3間分を再現展示している。この部分では、柱・連子窓・頭貫などの軸部は、部材がよく残っていて、展示は当初の形式をほぼ完全に復原している（口絵参照）。虹梁から上の架構部については、部分的に残された資料から、想定復原をおこなって新材におきかえている。PEGをしみこませた部材は非常に重く、本来の強度も失われている。一点一点の部材は鋼鉄の枠からのばした腕でささえ、上部の加重をうけない形にする必要があり、連子側柱筋内側に設けた支持枠はかなり大きなものとせざるを得なかった。柱や束の一部など、まだ科学的な保存処理のすんでいない部位については、将来、処置の完了をまってこの展示に組み込んで、展示の充実をはかっていきたいと考えている。

◆特別講演会その他

特別展示にあわせ、以下の特別講演会を開催した。

- ・1996年5月11日 工藤圭章「山田寺の建築と保存」
- ・1996年10月26日 猪熊兼勝「斉明朝の飛鳥」
- ・1996年11月2日 今泉隆雄「斉明朝の東北」

また、特別展示の図録として、『山田寺』『斉明紀』の2冊の図録を刊行した。このほか、陳列品として「猿石」を購入した。

今年度の総入館者数は85,161人で、その内訳は下表を参照されたい。なお、飛鳥資料館では、インフォメーション・ルームにおいて、観覧者の質問に応じている。

（岩本圭輔）

入館者数(1996.4.1～1997.3.31 開館日数314日)

区 分	個人観覧	団体観覧	有 料	無 料	合 計
一 般	27,012	9,441	79,047	6,114	85,161
高・大生	3,230	8,934			
小・中生	5,891	24,539			
計	36,133	42,914			